

機関番号：32411

研究種目：若手（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20730420

研究課題名（和文）高等学校への適応的な移行を実現するための主体的進路意思決定支援モデルの構築と実践

研究課題名（英文）Developing the model of autonomous support to make decision for smooth transition from junior high school to high school

研究代表者

永作 稔（NAGASAKU MINORU）

駿河台大学・心理学部・准教授

研究者番号：20447246

研究成果の概要（和文）：

本研究は高等学校への適応的な移行を実現するための主体的進路意思決定支援モデルを構築し、学校現場において進学動機を主体的なものに変化させるための実践的プログラムの開発を行うものである。そのため、必要なツール（質問紙と介入プログラム用の教材）の開発と適応的な高等学校への移行モデルの検証を行った。3年間の研究により、当初目的としていたツールの開発とモデルの検証を達成することができた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the present study was to development the tool for intervention and to examine the model of smooth transition from junior high to high school. This study has applied the framework of Self-Determination Theory (SDT) to support junior high to high school transitions and shown that autonomous motivation predicts school adjustment while controled motivation predicts school maladjustment. The results show that the purpose was able to achieve.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：教育相談

キーワード：進路指導、自己決定理論、中学生、高校生、進学動機、進路選択、学校移行

## 1. 研究開始当初の背景

中学校から高等学校への移行期は、義務教育段階を終え、自らの意思で学校を選択し、移行先で新たな環境に適応するまでのプロセスを経験する進路指導上きわめて重要な教育的機会であると考えられる。ところで、進路指導において重要視される「主体性の尊重」には理念と現実の乖離があることが指摘されている。渡辺・ハー（2001）は、この原因について「日本の進路指導の定義や理念そのものの方向性は決して間違っただけではなく、素晴らしいものであるが、それを実践できるようにするためのモデルが欠けている」と指摘している。このような「乖離」は、

進路指導における主体性の尊重はタテマエ論であるという論調を生むことにつながっている。つまり、主体的な進路選択とはあくまでも「理想」であり、「現実」としての高等学校の選択は、学業成績や地理的条件、あるいは家庭の事情などから、本人の意思とは無関係の部分で一定程度決まってしまう。したがって、「自分で決めた」という感覚を持ちにくいし、そのように指導しにくいと考えられているのである。このような問題を解決するためのアプローチとして、筆者らは自己決定理論をフレームとした方法を提案している（永作・新井、2005）。これまでの研究成果により、高等学校への進学動機が「無動

機よりも外的な進学動機」、「外的な進学動機よりも取り入れ的」と、少しでも自律的な動機として内在化できるように指導・支援することが、高等学校入学後の適応につながり、結果としてスムーズな移行・接続につながるということが実証されている。

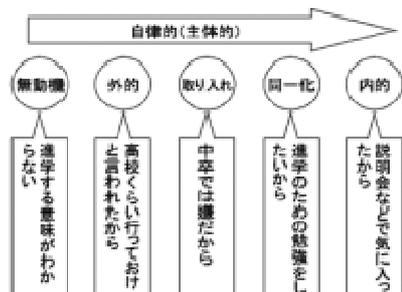


Figure1-1 主体的進路意思決定モデル

このモデルの有用性としては、1. 主体的か否かという二極論ではなく、主体性を段階的にとらえることができることや、2. 「高校くらい行っておけ」などの言葉がけにより統制的なかたちで進路意思決定をすると、高等学校入学後の学校不適応につながるということがデータにより実証されていること、3. 「高校くらい行っておけ」という統制的な言葉がけにも一定の意味づけができること（外的動機は無動機よりも入学後の適応を見込めるという点で意義があり、モデル上、進学動機の主体性を高めたという前向きなとらえ方ができること、4. 各種制約により、たとえ現実的に進学可能な進路先が1つしかなかったとしても、モデル上「進学することについての自分なりの意味づけ」によって主体性は変化しうるため、そのような状況においてもより主体的な進路意思決定を指導・支援することができる、などがある。

しかしながら、このモデルを実際の教育現場に適用して実践するにあたって必要になる現場で使いやすいツールと実践プログラムの開発には至っていなかった。

## 2. 研究の目的

本研究では上記の背景から、主体的進路意思決定モデルを土台として高等学校への適応的移行を説明する心理学的モデルを構築し、学校現場において進学動機を主体的なものに変化させるための介入プログラムの開発を行う。そのために以下の3点を検討する。

### (1) 必要なツールの準備

ツールとは具体的に高等学校への自律的な進学動機を測定するための尺度 (Autonomous Index for Motivation to enter high school : AIM) と、介入プログラムの教材資料である。

これまで使用していた尺度は、項目数が比

較的多く (29 項目)、無動機を直接測定できないなど、改善点が多いため、これらの問題をクリアした改訂版を開発する (AIM II)。

また、介入プログラムの教材については、中学校3年生を対象に進学動機をより主体的なものとするためのプログラムにする必要がある。学校現場での有用性を考えると、少ない回数で実施できることや、教員が自ら実施することが可能 (高度な専門性は不要) など、低コストで実施できるという点に加えて、生徒参加型のプログラムである (主体性を導くものであるため)、中学校3年生という発達段階に即しているなど、内容面での質的価値を付加する必要があると考えられる。

### (2) 適応的移行モデルの検証

次に、適応的移行モデルの検証である。中学校から高等学校への移行に限らず、適応的な移行を支援する場合には大きく2つの支援ポイントがある。つまり、移行前の選択支援と移行後の適応支援である (Figure2-1)。

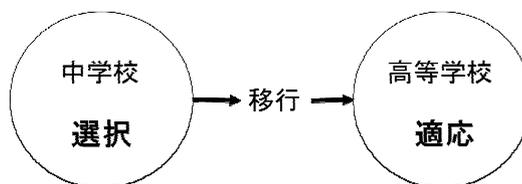


Figure2-1 適応的移行支援のポイント

したがって、この2つのポイントを取り入れた適応的移行モデルを構築することが、包括的な説明と介入の基盤となると考えられる。これにより、中学校での支援と高等学校での支援を実証に基づいて行うことが期待できる。

### (3) 介入プログラムの実施と効果の検証

最後に、本研究により開発されたプログラムを実際に生徒に実施し、介入プログラムの有効性を検証する必要がある。その際には、適切な統制群を設定したうえで、介入の効果が期待どおりに現れるか検討を行う。

## 3. 研究の方法

(1) 質問紙調査：本研究では中学生および高校生を対象とした質問紙調査を5回にわたり実施した。

### 調査内容

第1回調査 高校1年生 160名 (2008年7月)  
自律的・高校進学動機尺度の改訂版作成にあたり、原尺度項目を構成するための自由記述式調査を実施した。

第2回調査 中学校3年生 369名 (2008年12月～2009年1月)

改訂版自律的・高校進学動機尺度の開発

第3回調査 高校1年生 362名 (2009年5月、2010年5月)

改訂版自律的・高校進学動機尺度の開発および

び適応的移行モデルの検証

第4回調査 高校1年生241名(2010年10月)

適応的移行モデルの検証

第5回調査 高校1年生241名(2010年3月)

適応的移行モデルの検証

(2)介入研究

中学校3年生を対象としたプログラムの実践(介入研究)を1回実施した。

- ① 対象：関東地方の公立中学校1校の第3学年134名のうち、pre、post、followのすべての調査に回答した119名(男子60名、女子58名、不明1名)割付：2クラス分にあたる55名が実験群残りの79名が統制群に割り付けられた。
- ② 介入：AIM群には、1コマ50分の授業を2回、一ヶ月の間隔で行った。また、1回目の授業から2週間が経過した中間時点で課題をリマインドするための短いインストラクション(10分)を行った。なお、授業はすべて研究代表者が担当した。
- ③ 調査：介入直前(9月：pre)、直後(10月：post)、1ヶ月後(11月：follow)の3時点で調査を実施した。

4. 研究成果

5回の質問紙調査、および1回の介入研究から得られた主な研究成果を(1)ツールの開発(2)適応的移行モデルの検証(3)介入プログラムの実施と効果の検証に分けて報告する。

(1)ツールの開発：改訂版自律的高校進学動機尺度(Autonomous Index for Motivation to enter high school II: AIM II)の開発

①因子分析

項目準備作業を行い、項目の妥当性を確認した原尺度16項目について、最尤法プロマックス回転による探索的因子分析を行った。その結果をTable1に示す。

質問項目	因子負荷量			
	I	II	III	IV
<b>I. 無動機 (<math>\alpha=.93</math>)</b>				
19. 高校に進学することに、あまり価値を感じない	.596	-.01	.06	-.03
20. 高校に進学することに、あまり興味がでない	.590	-.02	.03	.00
18. 高校に進学する意味がよくわからない	.563	.00	.06	-.05
17. 高校には進学したくない	.500	.05	.08	.09
<b>II. 外的・取り入れの調整 (<math>\alpha=.90</math>)</b>				
1. 普通は高校に行くものだから	.04	.90	.00	-.03
2. 高校に行かないはずかしいから	-.02	.84	.07	-.01
3. 高校は行かなければならないものだから	.06	.83	.07	.01
6. 中学では遅いから	-.06	.76	.00	-.03
<b>III. 統合的・内的調整 (<math>\alpha=.89</math>)</b>				
4. 学校は楽しいから	.02	-.01	.95	-.04
19. 学校が好きだから	.08	-.03	.88	.12
5. 高校というものが楽しそうだから	-.09	.03	.79	.01
16. 行事が楽しめるから	.01	-.01	.66	-.03
<b>IV. 同一化的調整 (<math>\alpha=.89</math>)</b>				
11. 知識を増やしたいと思うから	.01	-.12	.02	.91
8. 自分の学力を上げたいから	.05	.02	.03	.86
13. 勉強したほうが得だと思うから	.02	.12	.06	.87
7. 進学のための勉強をしたいと思うから	-.10	.04	.07	.83

第I因子は無動機を測定する項目、第II因子は外的調整に相当する項目が2項目、取り入れの調整に相当する項目が2項目で構成

された。また、第III因子は統合的・内的調整の項目、さらに第IV因子は同一化的調整に該当する項目がそれぞれ含まれた。因子負荷量はすべて.65以上であり、二重負荷はなかった。

以上のように、準備された項目が、それぞれ想定された因子を構成する結果となった。

②信頼性・妥当性の検証

内的一貫性を確認するため、Cronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、すべての下位尺度において十分に高い信頼性があることが確認された。また、因子分析の結果、すべての項目がそれぞれ想定された因子を構成したことから、高い因子的妥当性を有することが検証された。また自己決定志向性を測定する尺度との相関関係から構成概念妥当性についても概ね確認された。以上のように、AIM IIは高い信頼性、妥当性を有する尺度であることが検証された。このように、以前の尺度に比べ項目数が少ない、項目表現が適切、無動機が測定できる等、学校現場でより使いやすい尺度としてAIM IIが作成された。

(2)適応的移行モデルの検証

適応的移行モデルの検証は、Figure2-1に示した適応的移行支援のポイントに基づき、進路選択時の要因として高校進学動機、進路適応時の要因として新入生ストレスを取り上げて、検討を行った(Figure4-1)

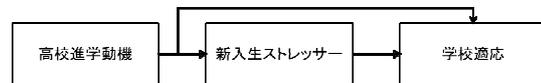


Figure4-1 適応的移行モデルの検証

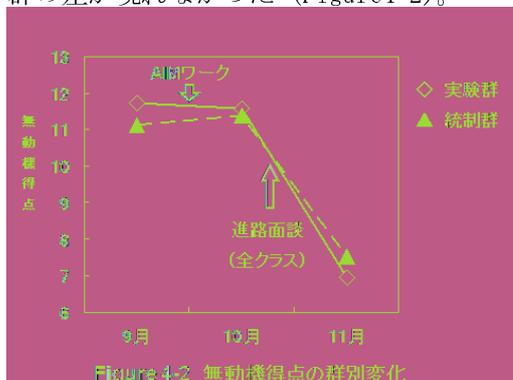
横断的および縦断的検討の結果、高校進学動機の自律性と新入生ストレスは、それぞれ独立に学校適応に影響を及ぼすことが示された。これにより、移行前の要因として高校進学動機が自律的であること、また新入生ストレスが少ないことが適応的な学校移行を導く要因であることが示唆された。

(3)適応的移行モデルの検証

自己決定理論に基づき、高校へ進学することの価値について主体的に気づくように促し、生徒が自律性を支援されていると感じることのできるように構成されたプログラム(AIMワーク)を開発し、その効果について検討した。仮説としてAIMワークを行った生徒は高校へ進学することの価値について新たな気づきを得ることにより、高校進学動機のうち無動機が低くなることが予測された。

無動機得点の変化(全体)：AIM IIの下位尺度である無動機(高校に進学する意味がわからない等)の変化を群別に検討するために、2(群)×3(時期)の2要因分散分析を行ったところ、時期の主効果が有意であった( $F[2, 350]=81.50, p<.001$ )。交互作用は見ら

れなかった。そこで、時期の要因について Tukey 法による多重比較を行った。その結果、11月の follow 時点における無動機得点 (7.31) が、pre、post 時点 (11.36、11.47) に比べて 1%水準で有意に低かった。したがって、すべての生徒が10月から11月にかけて無動機が下がっていることが示された。また、交互作用が有意にならず、実験群と統制群の差が現れなかった (Figure4-2)。



総合的に AIM ワークの効果は見られず、仮説は指示されなかった。しかし、介入後に行った自由記述式のアンケートから「何をすれば良いのかよくわからなかった」という感想が見られるなど、介入方法には一層の改善、構造化の余地があると考えられる。また、課題について生徒にもある程度の裁量を持たせることで、自律性を支援する環境設定としたが、中学生にとってはかえって「やりずらい」側面があったようである。これらについては今後の課題であると考えられる。また、事後に行ったプログラム評価では、内容として中学校2年生に行った方が良い内容のプログラムであるかもしれないとの意見が得られた。今後は、プログラムの内容をより精練し、中学生にとってわかりやすく構造化したり、対象学年を変えて実施したりするなどの改良を加え、さらなる検討を行う必要があると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 0 件)

[学会発表] (計 4 件)

- ① 永作稔、自律性支援が高校進学動機に与える影響 日本教育心理学会第 51 回総会発表論文集、2009、pp. 615.
- ② 永作稔、自律的高校進学動機尺度 II (AIMII) 作成の試み 日本心理学会第 73 回大会発表論文集、2009、pp. 1091.
- ③ 永作稔、AIM ワークによる高校進学動機の内在化 日本教育心理学会第 52 回総会発表論文集、2010、296.

- ④ NAGASAKU Minoru、Autonomous motivation to enter high school in Japan: The effect of autonomy support. 4th International Self Determination Theory Conference. Poster session Sat. May 15th No. 33.

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

[その他]

特記なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

永作 稔 (NAGASAKU MINORU)  
駿河台大学・心理学部・准教授  
研究者番号：20447246